# 楽曲紹介

解説＝一柳富美子

## シチェドリン
## カルメン組曲（G. ビゼーによる）〈シチェドリン生誕90年〉

ビゼー（1838-1875）の歌劇『カルメン』（1874）には名旋律が揃っており、様々な組曲や編曲が誕生したが、ロディオン・シチェドリン（1932- ）の『カルメン組曲』（1967）は異彩を放っている。なぜなら、この曲は舞踏が主役の作品に「再編曲」されているからだ。

作曲はシチェドリンの妻でバレリーナのマイヤ・プリセツカヤ（1925-2015）の依頼による。1966年にキューバの世界的振り付け師アルベルト・アロンソが彼女を主役として『カルメン』のバレエ化を提案してきた。ソ連とキューバの両国友好にも関わる国家企画に対して、プリセツカヤは当初、ショスタコーヴィチら巨匠に依頼したが、「ビゼーと競い合う気はない」と断られ、最後に白羽の矢が立ったのが夫のシチェドリンだった。若きオーケストレーションの天才は巨匠ビゼーの音楽を前に臆することなく、大胆で斬新な編曲を施し、踊りに大切なリズムを柱に置いて、見事な組曲を仕上げた。1967年4月20日のボリショイ劇場での初演は必ずしも好評ではなかったが、改作を経てからは世界中のバレエ団のレパートリーに入り、同世代の作曲家たちから「巨匠の横に自分の名前を並べる不遜な輩だ」と妬まれるほどの成功を収めた。

管楽器を全て排除した音楽は原曲の単なる変奏ではなく、原曲モティーフを全曲にちりばめ、歌詞の欠落を補って余りある描写力と才気に溢れている。特に打楽器群は、時に熱く時に厳しく、そしてしばしば滑稽に弾け、驚くほどの表現力で迫る。また音楽には『カルメン』以外のビゼーの舞台作品も用いられている。

組曲は以下の13曲から成る。**第1曲「序奏」** 開演を告げるベルが「ハバネラ」を奏でる。**第2曲「踊り」** 第4幕への前奏曲の華やかな「アラゴネーズ」。**第3曲「第1間奏曲」** 第1幕で男たちがカルメンを呼ぶシーン。死を暗示する「運命のテーマ」の変奏。**第4曲「衛兵の交代」** 第2幕への前奏曲「アルカラの竜騎兵」。**第5曲「カルメンの登場とハバネラ」** 第1幕カルメン登場の場面。**第6曲「情景」**

第1幕と第2幕の幾つかのシェーナの組み合わせ。**第7曲「第2間奏曲」**美しい第3幕への間奏曲。**第8曲「ボレロ」**『アルルの女』の「ファランドール」。**第9曲「闘牛士」**エスカミーリョ登場。第2幕「闘牛士の歌」。**第10曲「闘牛士とカルメン」**歌劇『美しきパースの娘』から「ジプシーの踊り」。**第11曲「アダージョ」**第1幕への前奏曲（運命のテーマ）と第2幕「花の歌」。**第12曲「占い」**第3幕のカルタ占い。**第13曲「終曲」**オペラの総括。第4幕を圧縮したような旋律が次々に繰り出されたあと、第2幕フィナーレや「運命のテーマ」、そして第1幕カルメン登場へ時間が逆回りし、この組曲冒頭の「序奏」を回想して静かに悲劇の幕を閉じる。

**[作曲年代]** 1967年　**[初演]** 1967年4月20日　モスクワ、ボリショイ劇場にて、ボリショイ・バレエ団による（振付：アルベルト・アロンソ、カルメン：マイヤ・プリセツカヤ）
**[楽器編成]** ティンパニ、打楽器Ⅰ（カスタネット、カウベル、ボンゴ、ギロ、小太鼓、チューブラーベル、ヴィブラフォン、マリンバ）、打楽器Ⅱ（トライアングル、クラヴェス、ギロ、ウッドブロック、タンバリン、小太鼓、ヴィブラフォン、マリンバ）、打楽器Ⅲ（トライアングル、クロタル、マラカス、ギロ、カバサ、むち、テンプルブロック、小太鼓、テナードラム、大太鼓、タムタム、グロッケンシュピール）、打楽器Ⅳ（トライアングル、ハイハットシンバル、タンバリン、トムトム、大太鼓、シンバル、タムタム）、弦楽5部

### 『白鳥の湖』の物語

ドイツのとある王宮。白鳥狩りに出かけた若き王子ジークフリートに、湖畔で出会った美しい娘オデットが身の上を語ります。「私はある国の王女ですが、悪魔の呪いで白鳥の姿に変えられてしまい夜の間だけ人間に戻るのです。この呪いを解く方法はただ一つ、私に永遠の愛を誓ってくれる男性が現れること」。二人は惹かれあいます。

しかし王子は、次の日の舞踏会でオデットそっくりに変身して現れた悪魔の娘オディールをオデットと間違って、愛の誓いを立ててしまいます。悲しむオデット。過ちに気づいた王子はオデットに赦しを乞い、悪魔の呪いに立ち向かうのでした。

写真提供：TM Photo album / PIXTA(ピクスタ)

## チャイコフスキー：バレエ『白鳥の湖』より（プレトニョフによる特別編集版）

これは特別な『白鳥の湖』（作曲1875-76、初演1877）との出会いである。バレエの本舞台を愛好している御仁たちなら兎も角、組曲版に慣れ親しんでいる方々はきっと「知らない曲が多い!」という感想をお持ちになるだろう。従来の組曲は有名旋律の抜粋なので、ストーリー展開は無視されてきた。ところが今回のプレトニョフ特別編集版は、『白鳥の湖』の粗筋を追いながら音楽が展開していく、謂わば、舞台の縮小版になっている。しかも、選曲を6つの楽章に見立て、各楽章が音楽的に完結するよう、若干曲順を変えたりもしている。つまり、演奏として纏まりのある大曲を目指しつつ『白鳥の湖』の物語を辿る、という画期的な編集になっているのである。従って、組曲版で有名な「4羽の白鳥」や「チャールダーシュ」のような物語展開に直接関係しない名旋律は全てカットされ、代わりに主人公二人の愛を象徴する旋律がこの編集版の中心を担っている。こんなことが出来るのも、チャイコフスキーのバレエ音楽を研究し尽くして、オーケストラ生き写しのピアノ編曲まで創作してしまうプレトニョフだからであろう。以下、粗筋と共に、6つの楽章を略述しよう。（なお、下線は各小品の原曲名、幕の呼び方はプレトニョフ録音盤に従う）。

Ⅰ. 導入曲―第1曲：原曲の導入曲と第1曲そのまま。舞台では開幕前の序曲の役割を果たしている。冒頭旋律は、のちに現れる「白鳥の主題」の変型。これから始まる物語が幸福に満ちたものではないことを予感させる。

Ⅱ. 第1幕前半から3曲抜粋：ジークフリート王子の成年を祝う三人の村娘の踊りが中心となる。イントラーダ（導入部）は6/8拍子、変ロ長調の流麗な旋律。続いてアンダンテ・ソステヌートのスラヴ風舞曲、最後にヴァリアシオン4の2/4拍子、ヘ長調アレグロの軽快な踊りで終わる。

Ⅲ. 第1幕後半から3曲抜粋：本来は、誕生祝いの夕暮れに空を行く白鳥を見かけて湖へ向かうシーンだが、この編曲では大胆に曲順が変更され、先ず「白鳥の主題」で有名なオデット姫との出逢いを描いた第2幕冒頭の情景でこの楽章を開始したあと、村祭りの場面へ戻って恋愛未体験の王子の心理を表現したシュジェと、最後は村祭りのポロネーズで盛大に締めくくるという構成。

楽曲としての纏まり感を優先したと言える。

Ⅳ. 第2幕から2曲抜粋：ジークフリート王子とオデット姫が出遭い、永遠の愛を誓う場面。1曲目の情景は、第1部分の軽快な音楽に続いて、二人の対話を描写する第2部分、気持ちが高揚する流麗な第3部分と不幸を暗示する第4の部分から成る。続く白鳥たちの踊りはこのプレトニョフ編集版の中核である。ハープに導かれてヴァイオリン独奏が歌うオデットと王子の愛のアンダンテ（グラン・アタージョ）の美しさは圧巻である。

Ⅴ. 第3幕から1曲：王子の花嫁選びの舞踏会。原曲では有名民族舞曲が密集しているが、それらには見向きもせずにプレトニョフが選んだのは、六人の花嫁候補が踊る6つの踊りのうちの2番目のヴァリアシオン2のみ。2/4拍子、ト短調の民謡風主題が、省略された全ての民族舞曲を代表する形となっている。

Ⅵ. 第4幕から2曲：オデットに似た黒鳥オディールに王子が騙されたことで、オデットが悲しみに暮れるアレグロ・アジタートの情景、そして全曲を締めくくる終曲では主題が短調から長調へ転調して、二人の愛が悪魔の妨害を克服したことを高らかに宣言する。

**[作曲年代]** 1875～76年　**[初演]** 1877年3月4日　モスクワ、ボリショイ劇場にて、ボリショイ・バレエ団による（振付：ヴェンツェル・レイジンゲル、オデット：ペラゲーヤ・カルパコワ、アンナ・ソベシチャンスカヤ）（バレエ初演）
**[楽器編成]** ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、コルネット2、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール）、ハープ、弦楽5部

ひとつやなぎ・ふみこ（音楽学）／ロシア音楽研究の第一人者。国際音楽学会ショスタコーヴィチ研究班アジア代表委員。ロシアオペラ・声楽・ピアニズムに特に造詣が深い。ロシア音楽研究会主宰。ロシアン・ピアノ・スクールin東京総合監修。研究・執筆、声楽指導、音楽通訳・翻訳・字幕を手掛け、邦訳したオペラ等の大曲だけでも50を超える。